

青年期における直接的泣きおよび代理的泣きの経験尺度の検討
— 共感性およびストレス対処との関連における男女差を含めて —

澤田忠幸, 橋本 巖, 松尾 浩一郎

愛媛県立医療技術大学紀要 第4巻 第1号抜刷

2007年12月

青年期における直接的泣きおよび代理的泣きの経験尺度の検討 — 共感性およびストレス対処との関連における男女差を含めて —

澤田 忠幸*, 橋本 巖**, 松尾 浩一郎***

The Examination of the Suitability of the Scale on the Adolescents' Emotional Crying: Relationship between Crying, Empathy and Stress Coping

Tadayuki SAWADA*, Iwao HASHIMOTO**, Koichiro MATSUO***

Abstract

In this research, it was investigated which of two types of scale is more suitable to measure the adolescents' emotional crying experience. Two hundred eighty two undergraduate students, including 114 men and 168 women, completed questionnaires on crying experience in adolescence, which included crying over one's own emotional events, and vicarious crying over others' emotional events. We carried out these measures by using two types of instruction. In scale A, participants rated each item in terms of frequency that they had cried. In scale B, participants rated each item in terms of experience of arousing emotion, and then suppressing or allowing tears to flow.

The results indicated that both scale A and scale B showed the same factor structures and that correlations between each correspondent factor of the two scales were very high. Though most of the scores showed floor effects in scale A, most of ones showed moderate distribution in scale B. While men reported less expressed crying than women, crying experience for men showed positive correlation with active stress coping and with empathy, especially when it was used scale B compared to scale A. These results clearly indicated the suitability of using scale B, which requires researchers to take into account awareness of arousing emotions in the experience of crying.

Key words : emotional crying, scale, crying frequency, experience of arousing emotion

序 文

泣くこと (crying) とは、外的刺激などにより涙腺が刺激され、通常以上の涙液が分泌されたために涙点 (涙道) から溢れ、涙液が目の外に流出する現象をさしている。しかし、私達が日常生活で経験する泣きの多くは、単に結果的な落涙でも、涙を武器にするなどの意図的・演劇的な行動でもなく、心理学的意味を内包している。すなわち、私達が泣くときには、“ある状況や出来事の中で、内なる情動の高まりを経験しつつ、高まる情動の抑制と表出の葛藤体験の結果として、涙を流し (weeping)、情動を表出 (crying) する” ということを経験している。このことは、青年期や成人期における“泣くこと”を情動制御の失敗や未熟な社会性を示すものとしてとらえるのではなく、泣くことを制御・抑制しようとする意識の中で感情の高まりを経験する、あるいは、自分自身が泣きそうになっていることを意識しながら、なんとか泣くことを抑制しようとしている主観的な情動葛藤

経験の結果としてとらえるという視点を提起するものといえる¹⁾²⁾³⁾。このような観点から青年期における“泣き”をとらえ直すと、泣くことは自己の弱さを露呈するなど、否定的意味のみを有するのではなく、自己と向き合い精神的成長につながる積極的側面を有すると考えられる。しかしながら、青年期を対象とした情動体験や泣きの経験について検討した研究は洋の東西を問わず極めて少ないのが現状である²⁾³⁾。

そこで、Hashimoto, et al.⁴⁾は、その第一歩として泣きを抑制あるいは表出する傾向を測定する質問紙尺度を作成している。これは、Williams & Morris⁵⁾およびVingerhoets, et al.¹⁾を参考にして、一般に青年期の男女が泣くことを経験するであろうと想定される出来事を記述したものである。但し、自分自身に直接起こった出来事で泣いた経験と他者に起こった出来事による代理的・共感的な泣きでは、泣くことや泣きの抑制に対する価値観が異なるとして、以下に示す2種類の場面の質問紙尺度を作成している点で、Williams & Morris⁵⁾およびVing-

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

**愛媛大学教育学部

***聖カタリナ大学社会福祉学部

erhoets, et al.¹⁾を発展させるものとなっている。

一つは、“自分自身に起こった出来事による直接経験によって泣いた経験（以下、“直接的泣きの経験”と略す）”尺度である。これは、各項目で記述されたような出来事を経験したことがあるか、また経験したことがあるならば、そのときに感情がこみあげて泣いたことがあるか、ということを出してもらい評定を求めるものである。もう一つは、“他者に起こった出来事による代理的経験によって泣いた経験（以下、“代理的泣きの経験”と略す）”尺度で、同じく高等学校入学以降、現在に至るまでの間に、自分ではない他者の身に起きた悲しいことやうれしいことに接した経験が自分にあったか、また経験したことがあるならば、そのときに感情がこみあげてきて泣いたことがあるか、ということを出して評定を求めるものである。

Hashimoto, et al.⁴⁾の尺度は、ある状況における泣きやすさの個人傾向(crying proneness)や結果的に泣いた頻度(crying frequency)を測定する¹⁾⁶⁾のではなく、“経験したことがない”“感情がこみあげてきたが、大抵泣くほどではなかった”“感情がこみあげてきたが、大抵泣くことをこらえた”“感情がこみあげてきて泣くことが多かった”の4段階で評定を求めることで、泣きそうになる感情の高まりの経験を考慮して泣きの経験を測定しようとしている点に特徴がある。この尺度を用いて、橋本ほか²⁾³⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾は青年期における泣きに関連する一連の研究を行っている。例えば、橋本ほか²⁾は、他者の前で泣いた場合と一人で泣いた場合、一人で泣いた場合でも結果的に泣いたことを他者に悟られた場合とそうではない場合に分類して、泣いたことの意味について検討している。また、澤田ほか³⁾は、Hashimoto, et al.⁴⁾と別サンプルを用いて尺度の妥当性を検証している。その結果、直接的泣きの経験尺度および代理的泣きの経験尺度ともに、Hashimoto, et al.⁴⁾で見出された3因子構造を概ね確認している。各因子の得点を男女で比較したところ、Vingerhoets, et al.¹⁾、Bekker & Vingerhoets⁶⁾、およびVan Tilburg, et al.¹⁰⁾等の先行研究と同様に、男女で感情の高まりを体験した程度は異ならないが、感情を抑えきれず泣いた体験では女性の方が多い状況と、泣いた体験のみならず感情の高まりそのものを体験した程度も女性の方が高い状況が存在することが示された。また、男女ともに泣きの経験はストレス・コーピングや共感性と関連していたが、その傾向は男性に比べ女性で顕著であることが示された。同様に、橋本ほか⁷⁾、澤田ほか⁸⁾、および松尾ほか⁹⁾は、ネガティブな出来事によって泣いた経験と泣いた結果生じた自己意識の変化や他者との関係について、エピソード内容とも関連づけて検討を行っている。

これらの一連の成果が示すように、直接的な泣きの経験および代理的な泣きの経験について、男女による違いや共通点¹⁾⁶⁾¹⁰⁾、共感性やストレス対処などの個人差要因との関連³⁾⁷⁾⁹⁾¹¹⁾などが明らかにされてきた。しかし、これまでHashimoto, et al.⁴⁾で開発された尺度の有効性自体については十分検討されていない。そこで本研究では、

Hashimoto, et al.⁴⁾で開発された泣きの経験尺度に加え、同一項目について泣いた頻度を尋ねる教示で回答を求めた場合の2種類のスケールを作成し、原尺度の有効性について、因子構造や尺度得点の分布のみならず共感性やストレス対処との関連性を含めて検討する。

方 法

調査対象

中四国地方の国公私立3大学に在籍する男女学生に調査用紙を配布した。本研究では、回答が得られた287名のうち、最終的に各因子で欠損値が1つ以内であった282名(男性114名、女性168名)を分析対象とした。学年および男女ごとの分析対象者数をTable 1に示す。平均年齢は19.7歳(SD=1.3, range:18-25)であった。

Table 1 調査対象者の属性ごとの人数

	1回生	2回生	3回生以上	計
男 性	15	54	44	113
女 性	93	39	36	168

註) 学年を未記入の男性1名を除く

調査内容

自記式質問紙調査で以下の内容からなる。

1. 泣きの経験

直接的泣きの経験尺度24項目、代理的泣きの経験尺度12項目について2種類のスケールを作成した。スケールAでは、各項目に記述されるような出来事で、高校入学以来現在までの間で、どの程度泣いたことがあるかについて、“泣いた経験はまったくない(1)”“泣いた経験がまれにある(2)”“泣いた経験がときどきある(3)”“泣いた経験がしばしばある(4)”の4段階で評定を求めた。スケールBでは、同じ項目についてHashimoto, et al.⁴⁾および澤田ほか³⁾と同様に、“経験したことがない(1)”“感情がこみあげてきたが、大抵泣くほどではなかった(2)”“感情がこみあげてきたが、大抵泣くことをこらえた(3)”“感情がこみあげてきて泣くことが多かった(4)”の4段階で評定を求めた。

2. 共感性

橋本・角田¹²⁾の共感性尺度を用いた。この質問紙は、Davis¹³⁾や登張¹⁴⁾と同様に、“想像的感情移入”“視点取得”“個人的苦痛”“共感的関心”の4因子構造が想定されている。共感性の情動的な側面(“個人的苦痛”“共感的関心”)だけでなく、認知的な側面(“想像的感情移入”“視点取得”)を含むところに特徴がある。本研究では、澤田ほか³⁾と同様に、回答者の負担軽減を目的として原尺度37項目から25項目を採用した。項目ごとに自分自身にどの程度当てはまるかについて、“まったくあてはまらない(1)”から“非常によくあてはまる(7)”の7段階で評定を求めた。

3. ストレス対処

尾関¹⁵⁾の14項目からなるコーピング尺度を用いた。この尺度は大学生向けに開発され、各自の現在のストレスに対する対応の仕方について評定を求めるものである。尾関は、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する“問題焦点型対処”と、ストレスにより引き起こされる情動反応に焦点を当てて注意を切り替えたり、気持ちを調節する“情緒焦点型対処”を区別せず、両者を含めて“積極的対処”とし、不快な出来事から逃避したり否定的に解釈する“回避・逃避的対処”との2因子構造を仮定している。各項目について、どの程度現在の自分自身の考え方や行動に近いかの観点から、“まったくしない(0)”から“いつもする(3)”の4段階で評定を求めた。

手続き

調査票は、研究協力の依頼文とフェイスシート、泣きの経験(スケールA)、共感性、ストレス対処、泣きの経験(スケールB)の順で構成された。実施にあたっては、無記名式で守秘義務を徹底した。また、研究協力の依頼文では、泣くという極めて個人的な内容であるため、調査対象者自身が答えることができる内容のみを記述してもらうことなどを明記した。加えて、スケールAとス

ケールBでは、質問項目が同一であるが、教示内容が異なっている点について注意を喚起した。

結 果

1. 2種類の泣きの経験尺度の因子構造の検討

スケールAおよびスケールBについて、それぞれ因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、因子構造を検討した。

直接的泣きの経験

澤田ほか³⁾の分析手続きに基づき、24項目について、まずスケールBで回答に著しく偏りのあった項目や複数の因子に負荷している項目等を除外して因子分析を行った。その結果、最終的に“愛着危機”“達成・敗北”“確信のなさ”の3因子構造を抽出することができた。次に、スケールBでの分析結果を基に、スケールAでも因子分析を行ったところ、同じく3因子構造が確認された。Amos5.0を用いて確認的因子分析を行ったところ(Table 2)、モデルとデータとの適合度を示す各種指標値は、スケールBではGFI=.915, AGFI=.882, RMSEA=.068と概ね良好であった。一方、スケールAではGFI=.897, AGFI=.858, RMSEA=.078であった。

Table 2 「直接的泣きの経験」尺度の確認的因子分析結果

	スケールA			スケールB (Hashimoto, et al., 2006)		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3
因子1 「愛着危機」 8項目						
23. 他者を自分の言葉や態度で傷つけてしまった	.580			.555		
2. 他者からひどく叱られたり、説教された	.577			.558		
19. さびしくてしかたがないと強く感じた #	.649			.626		
11. 大切な人と深刻な口論や対立をした	.657			.648		
12. 他者から傷つけられたり、いじめられた	.610			.534		
5. 信じていた人に裏切られた	.578			.590		
3. 失恋した	.508			.455		
4. 他者からの思いがけない優しさに接した	.604			.479		
因子2 「達成・敗北」 5項目						
1. 自分が一生懸命練習してきて臨んだ試合で勝利したり、大会などでよい成績を残すことができた		.788			.765	
10. 仲間たちとともに一つのことに取り組み、やり遂げた		.760			.697	
7. 自分が努力してきて臨んだ試合で敗北したり、大会などで納得のいく結果がでなかった		.608			.606	
6. 卒業式に友人と離れたり、今までの思い出がよみがえった		.675			.588	
14. みんなで応援していたチームが勝利した		.438			.333	
因子3 「確信のなさ」 2項目						
18. 自分の将来のことを考え、どうしたらいいのか、と途方にくれてしまった			.820			.751
17. 勉強や技術の習得などが自分の思うように進まなかった			.780			.777
	因 子 間 相 関					
	愛着危機	.809		.778		
	達成・敗北	.536***	.778	.645***	.730	
	確信のなさ	.685***	.564***	.779	.698***	.737
	削 除 項 目					
21. 激しい身体的痛みを襲われた				愛 着 危 機		
22. 非常に自分の体が疲れていた				確 信 の な さ		

註1) ***p<.001

註2) #の項目は、澤田ほか(2006)では「確信のなさ」因子に負荷していた

註3) 因子間相関表の対角線上の数値はクロンバックの α 係数を示す

代理的泣きの経験

同様に因子分析を行ったところ、スケールBおよびスケールAともに“身近な他者の肯定的感情”“身近な他者の否定的感情”“メディア・物語の他者の感情”の3因子を抽出することができた。確認的因子分析を行ったところ (Table 3), スケールBではGFI=.848, AGFI=.767, RMSEA=.126であった。一方、スケールAではGFI=.867, AGFI=.796, RMSEA=.116であった。直接的泣きの経験尺度に比べ、モデルとデータとの適合度は高くなかった。

Table 4 に直接的泣きの経験尺度および代理的泣きの経験尺度の両者について、スケールごとの尺度得点と両

スケール間の順位相関係数を示す。Table 4 を見ると、両スケール間に対応する因子の尺度得点の相関は極めて高い。また、スケールAの平均点はほとんどの因子で1点台であり、フロアー効果を示していることが読み取れる。一方、Hashimoto, et al.⁴⁾および澤田ほか³⁾と同じ手続きを用いたスケールBでは、男女ともに平均点は概ね2点台であり、感情がこみあげてきてはいるが、泣くまでに至らず泣くことをこらえている様子がかうかがえる。男女による違いの有無を検討するために、各因子の尺度得点を基にt検定を行ったところ、スケールA、スケールBともに全ての因子で、男性よりも女性の方が、有意に得点が高かった (Table 5)。

Table 3 「代理的泣きの経験」尺度の確認的因子分析結果

	スケールA			スケールB (Hashimoto, et al., 2006)		
	F 1	F 2	F 3	F 1	F 2	F 3
因子1 「身近な他者の肯定的感情」 4項目						
7. 知人がとても喜んでる姿を目のあたりにしたり、本人からその話を聞いたりした	.892			.819		
8. 大切な人 (家族や友人など) がとても喜んでる様子を目のあたりにしたり、本人からその話を聞いたりした	.927			.860		
2. 知人からとてもいいことがあったという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした	.621			.773		
11. 大切な人 (家族や友人など) からとてもいいことがあったという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした	.665			.839		
因子2 「身近な他者の否定的感情」 4項目						
12. 大切な人 (家族や友人など) がとても悲しい思いをしているという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした		.672			.752	
4. 知人がとても悲しい思いをしているという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした		.728			.783	
1. 大切な人 (家族や友人など) の悲しんでいる様子を目のあたりにしたり、本人から話を聞いたりした		.725			.584	
6. 知人がとても悲しんでいる様子を目のあたりにしたり、本人からその話を聞いたりした		.847			.811	
因子3 「メディア・物語の他者の感情」 4項目						
10. ドキュメンタリー番組やニュース番組で他者がとてもつらそうにしている姿を見た			.798			.724
3. 映画や本などで物語の登場人物がひどい目にあっている様子を見た			.769			.706
9. 映画や本などで物語の登場人物がとてもすばらしいことをやり遂げた姿を見た			.558			.691
5. ドキュメンタリー番組やニュース番組で他者がものごとをやり遂げ、とても喜んでる姿を見た			.644			.741
	因子間相関					
身近な他者の肯定的感情	.861			.892		
身近な他者の否定的感情	.568***	.817		.697***	.813	
メディア・物語の他者の感情	.436***	.647***	.789	.544***	.542***	.806

註1) ***p<.001

註2) 因子間相関表の対角線上の数値はクロンバックのα係数を示す

Table 4 2種類のスケールによる泣きの経験尺度得点 (平均値および標準偏差) と相関係数

	スケールA	スケールB (Hashimoto, et al., 2006)	順位相関係数
直接的泣きの経験			
愛着危機	1.82(.661)	2.26(.667)	.831
達成・敗北	1.73(.740)	2.08(.693)	.779
確信のなさ	1.72(.893)	2.27(.902)	.810
代理的泣きの経験			
身近な他者の肯定的感情	1.18(.415)	1.79(.534)	.494
身近な他者の否定的感情	1.51(.663)	2.07(.710)	.709
メディア・物語の他者の感情	2.02(.836)	2.54(.796)	.821

Table 5
泣きの経験尺度、共感性およびストレス対処の男女別平均点

	男性(n=114)	女性(n=168)	
直接的泣きの経験			
愛着危機	1.42 (.469)	2.10 (.631)	***
	1.90 (.541)	2.50 (.635)	***
達成・敗北	1.39 (.569)	1.97 (.752)	***
	1.84 (.569)	2.24 (.724)	***
確信のなさ	1.22 (.431)	2.06 (.963)	***
	1.78 (.645)	2.60 (.904)	***
代理的泣きの経験			
身近な他者の肯定的感情	1.05 (.201)	1.28 (.491)	***
	1.66 (.482)	1.88 (.551)	***
身近な他者の否定的感情	1.24 (.434)	1.69 (.729)	***
	1.84 (.593)	2.22 (.741)	***
メディア・物語の他者の感情	1.58 (.661)	2.32 (.813)	***
	2.16 (.755)	2.80 (.721)	***
共感性			
想像的感情移入	4.50(1.168)	4.85(1.197)	*
視点取得	4.36(1.002)	4.37(.966)	
共感的関心	5.04(1.076)	5.27(1.015)	
個人的苦痛	4.25(1.013)	4.53(1.019)	*
ストレス対処			
積極的対処	1.43(.469)	1.64(.525)	***
回避的・逃避的対処	1.55(.637)	1.47(.594)	

註1) 括弧内は標準偏差, 右端は t 検定結果を示す
 註2) ***p<.001, *p<.05
 註3) 泣きの経験尺度の上段はスケールA, 下段はスケールBの評定値を示す

2. 共感性, ストレス対処

主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行ったところ, 共感性およびストレス対処ともに先行研究で見出されている因子構造が確認された。共感性尺度では, “想像的感情移入(8項目: $\alpha = .861$)” “視点取得(6項目: $\alpha = .747$)” “共感的関心(4項目: $\alpha = .639$)” “個人的苦

痛(5項目: $\alpha = .633$)”の4因子が確認された。Davis¹³⁾や登張¹⁴⁾によると, “想像的感情移入”とは, 小説や映画などの中の架空の他者に感情移入する傾向を示しており, “視点取得”は, 現実の他者の立場に立って気持ちを想像する傾向を示す。これに対し, “共感的関心”とは, 他者の不運な感情体験に対して, かわいそう, 心配するなど他者に向かう情動反応が起こる傾向を示し, “個人的苦痛”とは, 他者の苦痛に対して, 苦痛や不安, 動揺など, 他者に向かわない自分中心の感情的反応が起こる傾向を示している。一方, ストレス対処尺度では, “積極的対処(9項目: $\alpha = .679$)” “回避・逃避的対処(5項目: $\alpha = .663$)”の2因子構造が確認された。

男女別の尺度得点をTable 5に示す。共感性では, “視点取得”および“共感的関心”では男女差は認められず, “想像的感情移入” “個人的苦痛”の2因子で, 男性よりも女性の方が得点が高かった。一方, ストレス対処では男性よりも女性の方が“積極的対処”得点が高いことが示された。

3. 泣きの経験と共感性, ストレス対処との関連

男女それぞれについて, 各因子の尺度得点間の順位相関係数を算出してスケールによる違いを検討した。その結果, 女性ではスケールAおよびスケールBのいずれを用いた場合でも, 泣きの経験尺度と共感性やストレス対処との関連の仕方に大きな違いは認められなかった(Table 6)。一方, 男性では感情の高まりの程度を考慮しない場合(スケールA), 共感性やストレス対処との関連が弱くなることが明らかとなった(Table 7)。

Table 6 女性における泣きの経験と共感性, ストレス対処との関連 (n=168)

	直接的泣きの経験			代理的泣きの経験		
	愛着危機	達成・敗北	確信のなさ	身近な他者の肯定的感情	身近な他者の否定的感情	メディア・物語の他者の感情
共感性						
想像的感情移入	.324***	.247***	.139+	.188*	.252***	.469***
	.356***	.310***	.108	.142+	.272***	.411***
視点取得	.286***	.227**	.133+	.197*	.182*	.210**
	.241**	.218**	.092	.191*	.212**	.098
共感的関心	.202**	.310***	.193*	.237**	.298***	.354***
	.231**	.415***	.215**	.191*	.316***	.302***
個人的苦痛	.259***	.042	.278***	.015	.236**	.181*
	.339***	.177*	.308***	.056	.272***	.354***
ストレス対処						
積極的対処	.302***	.227**	.192*	.264**	.217**	.186*
	.320***	.303***	.127	.233**	.229**	.186*
回避・消極的対処	-.027	-.027	-.019	-.024	-.022	.074
	-.082	-.073	-.073	-.032	-.057	.120

註1) 上段はスケールB (Hashimoto, et al., 2006), 下段はスケールAを用いた際のスピアマンの順位相関を示す
 註2) ***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

Table 7 男性における泣きの経験と共感性、ストレス対処との関連 (n=114)

	直接的泣きの経験			代理的泣きの経験		
	愛着危機	達成・敗北	確信のなさ	身近な他者の肯定的感情	身近な他者の否定的感情	メディア・物語の他者の感情
共感性						
想像的感情移入	.360*** .401***	.322*** .189*	.185* .062	.188* .063	.236* .256**	.422*** .469***
視点取得	.324*** .310***	.163+ .093	.191* .211*	.187* -.059	.236* .178+	.340*** .244**
共感的関心	.113 .105	.102 .172+	.025 -.024	.121 -.022	.281** .210*	.107 .110
個人的苦痛	.268** .186*	.207* .142	.127 .116	.050 .038	.195* .138	.081 .109
ストレス対処						
積極的対処	.193* .245**	.289** .150	.138 .189*	.167+ .087	.167+ .159+	.286** .259**
回避・消極的対処	-.041 -.001	-.010 -.111	.028 -.044	-.031 -.026	.015 -.128	.074 .001

註1) 上段はスケールB (Hashimoto, et al., 2006), 下段はスケールAを用いた際のスピアマンの順位相関を示す

註2) ***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

考 察

本研究では、泣きの経験尺度について、Hashimoto, et al.⁴⁾で開発されたオリジナルの回答方式で実施した場合(スケールB)と、泣いた頻度を尋ねる教示で回答を求める場合(スケールA)の2種類のスケールで実施し、測定値の分布や共感性およびストレス対処との関連のあり方から、スケールBの有効性について比較検討を行った。

その結果、両スケールともに概ねHashimoto, et al.⁴⁾および澤田ほか³⁾と同様の3因子構造が確認された(Table 2, Table 3)。対応する各因子間の尺度得点の相関もきわめて高く(Table 4)、両スケールはともに泣きの経験を測定していることがわかる。一方、Table 4およびTable 5に示されたように、両スケールの違いは泣きに至る情動喚起のプロセスを反映しているか否かにあることが確認された。すなわち、ある状況での泣いた頻度を尋ねたスケールAでは、尺度得点の多くでフローア効果の傾向が示されたのに対し、感情の高まりを考慮して泣いた経験の頻度をたずねたスケールBでは、泣くほどではないものの、感情の高まりを体験する、あるいは感情の高まりと抑制の葛藤を体験している様子がかがえた。また、男性に比べ女性の方が泣いた経験や泣きに至る感情の高まりの経験を多くもつことが示された。

次に、泣きの経験尺度と共感性との関連について検討したところ、スケールによる違いのみならず、男女によってスケールの違いの影響の仕方が異なることが明らかとなった。Table 6とTable 7を見ると、女性に比べ男性の方が、スケールB (Hashimoto, et al.⁴⁾)を用いるよりもスケールAを用いることで、多くの項目間で相関の程度

が弱くなることが示された。女性では“身近な他者の肯定的感情”と想像的感情移入、“メディア・物語の他者の感情”と視点取得の間で、スケールBを用いた場合には有意であった相関がスケールAを用いた場合には認められなかった。一方、男性では“達成・敗北”と個人的苦痛、“確信のなさ”と想像的感情移入、“身近な他者の肯定的感情”と想像的感情移入および視点取得、“身近な他者の否定的感情”と視点取得および個人的苦痛で、スケールBを用いた場合には有意であった相関が、スケールAを用いた場合には認められなかった。

このことから、女性に比べ泣くことが少なかった男性では、内的感情の高まりを反映せず、結果として泣いた頻度のみを測定するスケールAを用いた場合には、共感性との関連が弱くなることがわかる。一方、女性では感情の高まりが結果として泣きに至りやすいために、スケールA、スケールBのいずれを用いた場合でも共感性との関連の仕方に大きな違いが見られなかったと考えられる。すなわち、男女ともに共感性は結果としての泣いた頻度よりも、泣きに至る過程としての感情の高まりやすさと関連しており、女性では感情の高まりが結果として泣くことにつながりやすいために、両尺度で相関の現れ方に大きな違いが見られなかったと解釈される。

一方、泣きの経験とストレス対処との関連では、泣くことは“回避・逃避的対処”傾向とは関連しておらず、“積極的対処”傾向と結びついている点では、男女による違いは認められなかった。“積極的対処”傾向との関連で、女性では“確信のなさ”、男性では“達成・敗北”との間で、スケールB (Hashimoto, et al.⁴⁾)で有意であった相関がスケールAを用いた場合には関連が見られなかったが、スケールによる違いは小さく、男性に比べ女性の

方が直接的泣きの経験および代理的な泣きの経験と“積極的対処”傾向との関連が強いことが示された。

以上の点を総合すると、スケールごとの尺度得点の分布の違いのみならず、共感性との関連の仕方にスケールによる違いや男女差が示されたことから、青年期の泣きの経験を測定する場合、結果として泣いた頻度のみを尋ねるスケールAに比べ、Hashimoto, et al.⁴⁾で開発されたスケールBを用いることの有効性が示されたといえる。Van Tilburg, et al.¹⁰⁾は、共感的傾向が高いほど泣く傾向(crying proneness)が高いことを明らかにしているが、本結果からはさらに以下の点を指摘することができる。すなわち、共感性の側面は泣きに至る感情の高まりと関連している一方、結果として涙し泣くことが、積極的ストレス対処と関連していることがうかがえる。また、Table 6とTable 7に示されたように、男性でもスケールの違いに関わらず、泣きの経験と関連する側面も認められた。このことは、男女にかかわらず、感情の高まりが泣くことにつながりやすい場面と、男性においては泣くことに対する抑制がかかりやすい場面があることを示唆している¹⁾³⁾⁶⁾¹⁰⁾。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。スケールBを用いた結果に基づき、共感性およびストレス対処と泣きの経験との関連について、Hashimoto, et al.⁴⁾および澤田ほか³⁾の結果と比較したところ、ストレス対処傾向では一致した傾向が示された。すなわち、直接的泣きの経験あるいは代理的な泣きの経験の程度は“回避・逃避的対処”傾向とは関連が示されず、男女により程度の差はあれ“積極的対処”傾向と関連が示された。一方、共感性との関連では、男性に比べ女性の方が関連する項目が多いという点では同様の傾向がうかがえるが、本研究ではHashimoto, et al.⁴⁾、澤田ほか³⁾に比べ、多くの因子間で相関が有意であった。実際、3つの研究を通じて共通していたのは、女性で“想像的感情移入”とメディア・物語の他者の感情、“個人的苦痛”と確信のなさおよび身近な他者の否定的感情で有意な相関が確認された点のみであった。これは、手続きの違いが影響している可能性が考えられる。すなわち、Hashimoto, et al.⁴⁾および澤田ほか³⁾では、調査対象は総合大学と医療福祉系大学を中心とする学生と異なるものの、直接的泣きの経験尺度項目と対応した青年期に泣いた経験のエピソードの記述を求め、悲しい出来事で泣いた経験を中心としてその内容がもっともらしく、かつ尺度項目で有効回答が得られているサンプルのみを分析対象としている。一方、本研究では具体的なエピソードの記述は求めている。このような違いから、本研究の分析対象者は、実際に質問紙によって尋ねたような内容で泣いた経験をもつかどうかの確認はできていない。その結果、泣きの経験尺度の各因子と共感性の各因子との関連の仕方には、一連の研究の中で一致しない側面が生じたと考えられる。この点の検討については、サンプル対象による評定値の変動も大きく今後の課題である。

以上のような限界はもちつつも、本研究では、澤田ほか³⁾と同様の因子構造を示すとともに、Hashimoto, et al.⁴⁾で開発されたスケールを用いることの実効性が示されたといえる。今後は、共感性および積極的ストレス対処との関係について、3者間の因果関係モデルの構築を含め、より詳細に検討していくことが必要と考えられる。

引用文献

- 1) Vingerhoets, A.J.J.M, Boelhouwer, A.J.W, Van Tilburg, M.A.L., et al (2001): The situational and emotional context of adult crying. In: *Adult Crying: A biopsychosocial approach*, Vingerhoets, A.J.J.M. & Cornelius, R.R.(eds), Chap.5, pp.71-90, Hove, UK : Brunner-Routledge.
- 2) 橋本巖, 澤田忠幸, 松尾浩一郎他(2006): 青年における泣きの対人的表出制御と関連要因の検討—「ひとりになって泣くこと」と「人前でなくこと」—, 愛媛大学教育学部紀要, 53(2), 45-55.
- 3) 澤田忠幸, 橋本巖, 松尾浩一郎(2006a): 青年期における直接的・代理的場面での「泣き」の経験—男女差および共感性, ストレス・コーピングとの関連に焦点を当てて—, 愛媛県立医療技術大学紀要, 3(1), 1-8.
- 4) Hashimoto, I., Sawada, T., & Matsuo, K. (2006): Situational factors that moderate gender differences in regulation of adolescent emotional crying. 19th Biennial ISSBD meeting programme and abstracts, July 2-6, 2006, Melbourne Australia (published as a CD-ROM at the conference).
- 5) Williams, D.G., & Morris, G.H. (1996): Crying, weeping or tearfulness in British and Israeli adults. *British Journal of Psychology*, 110, 217-226.
- 6) Bekker, M.H.J., & Vingerhoets, A.J.J.M. (2001): Male and female tears: Swallowing versus shedding? The relationship between crying, biological sex and gender. In: *Adult Crying: A biopsychosocial approach*, Vingerhoets, A.J.J.M. & Cornelius, R. R. (eds), Chap.6, pp.91-114, Hove, UK: Brunner-Routledge.
- 7) 橋本巖, 澤田忠幸, 松尾浩一郎(2006): 青年期において泣いたことによる心理的变化とストレス対処傾向および共感性との関連, 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 397.
- 8) 澤田忠幸, 橋本巖, 松尾浩一郎(2006b): 青年期における直接的・代理的泣きの経験と泣いたことによる心理的变化との関連, 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 398.
- 9) 松尾浩一郎, 橋本巖, 澤田忠幸(2006): 青年期における泣いたことによる心理的变化—泣いたときに喚起された感情及びストレス対処傾向との関連—, 日本心理学会第70回大会発表論文集, 1039.
- 10) Van Tilburg, M.A.L., Unterberg, M.L., & Vingerhoets,

- AJ.J.M.(2002) : Crying during adolescence : The role of gender, menarche, and empathy, *British Journal of Developmental Psychology*, 20, 77-87.
- 11) Vingerhoets, A.J.J.M, Miranda, A.L., Van Tilburg, M.A.L., et al.(2001) : Personality and crying. In : *Adult Crying : A biopsychosocial approach*, Vingerhoets, A.J.J.M. & Cornelius, R.R. (eds), Chap.7, pp.115-134, Hove, UK : Brunner-Routledge.
 - 12) 橋本巖, 角田豊(1992) : 感情の「わかりにくさ」に関する信念と青年の孤独感・共感性の関係(Ⅱ), *愛媛大学教育学部紀要*, 教育科学, 39(1), 63-74.
 - 13) Davis, M.H.(1983) : Measuring individual differences in empathy : Evidence for multidimensional approach, *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
 - 14) 登張真稲(2003) : 青年期の共感性の発達 : 多次元視点による検討, *発達心理学研究*, 14, 136-148.
 - 15) 尾関友佳子(1993) : 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂 : トランスアクションナルな分析に向けて, *久留米大学大学院比較文化研究科年報*, 1, 95-114.

要 旨

本研究では, Hashimoto, et al.(2006)で開発された“青年期の情動的な泣きの経験尺度(スケールBと称す)”に加え, 同一項目について泣いた頻度のみで回答を求める尺度(スケールAと称す)を新たに作成し, 中四国地方の国公私立3大学に在籍する男女学生計282名を対象として実施した。そして, 因子構造や尺度得点の分布, 共感性やストレス対処との関連からスケールB (Hashimoto, et al., 2006)の有効性について検討した。

その結果, 両尺度ともに因子構造は同一であり, 対応する因子間相関も高いことが示された。しかし, スケールAでは得点の多くにフロアー効果が認められる点や, 共感性および積極的ストレス対処との関連でもスケールBでは認められる相関が有意でなくなることが示された。以上の点から, 結果として泣いた頻度のみを尋ねるスケールAよりも泣きにいたる感情の高まりを考慮したスケールBの有効性が示された。

附 記

本研究の調査は, 平成17-19年度科学研究費補助金(課題番号17653073 代表者:橋本巖)の助成を受けて行われた“青年期および成人期における感情経験と泣くこととの関係”に関する一連の研究プロジェクトの一部である。なお, 本研究の一部は3名の連名により日本心理学会第71回大会(2007)で発表をおこなった。